

子どもの適応と学級環境認知における 現実・選好の乖離について

平田乃美¹・佐古順彦²

(¹白鷗大学教育学部；²早稲田大学人間科学学術院)

キーワード：現実 (Actual)・選好環境 (Preferred)、学級環境尺度、学校適応

1. はじめに

1960年代以降、児童・生徒の学級環境に対する知覚・認知を測定する指標が多数考案され、アメリカを中心に数多くの教育環境尺度が開発実践されてきた (Fraser & Walberg, 1991)。学校現場において、教師自身が簡易に実施して担当学級の情報を必要に応じて入手できるツールの普及は、国を問わず有益であったのだろう。教育環境尺度は、現在ではアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ベルギー、フィンランド、イスラエル、インド、インドネシア、韓国、台湾、シンガポール等さまざまな国や地域で学級経営や生徒指導に活用されている。日本でも国外で標準化された学級環境測定指標の日本版 (例えば、古川, 1988) や独自指標 (例えば、伊藤・松井, 2001) などが開発されている。また、アメリカ教育学会 (AERA: American Educational Research Association) では教育環境測定指標の専門分科会 (SIG: Special Interest Group) が組織され、国際誌 Learning Environment Research Journal が刊行されるなど国際研究ネットワークも活発に展開している。

学級環境測定指標については、筆者らも小・中学校、少年鑑別所、不登校学級、公立・私立高等学校、大学・短期大学の児童・生徒・学生を対象に調査を継続してきた。そこで本稿では、本章に続く第2章において教育環境測定指標の研究背景の整理¹⁾、第3章では現実 Actual および選好 preferred 環境測定フォームを用いたこれまでの研究成果の概観をおこなう。特に、第3章においては、「大学の授業評価－学力とニーズ－」²⁾、「特色ある公立高校－総合選択制の風土－」³⁾、「うまく機能しない、難しい学級－教師の手応えの可視化－」⁴⁾、「少年鑑別所－非行少年の学級環境認知－」⁵⁾の4つの実践例を通して、「子どもの学校生活への適応と学級環境認知における現実・選好の乖離の関連」という視点から該当データのエッセンスを振り返る。最後に、第4章では各データの総合考察を、第5章では今後の課題について考えたい。

2. 研究の背景

【学校のエトス】

学校・学級風土や文化特質（エトス）の要因に関する研究は、その重要性が指摘されるようになって四半世紀を迎える。米国においては、第二次世界大戦後の人口増加、1960年代の公民権運動の高揚、1975年の障害児教育の一般教育への統合、出生率や教育予算の変動等、学校をとりまく社会的要因が、学校を媒介して子どもの学習に負の影響をもたらしたとの世論を背景に、学校の風土・文化の研究が特に重視されるようになった（Sarason & Klaber, 1985）。さらに、米国では教育行政の地方分権主義や学区制から地域差・学校差が生じやすく（矢野, 1997）、教育環境研究への関心は現在も高い。

【生態学派と認知学派】

学校・学級風土やエトスを扱う教育環境の研究には、生態学派とよばれる物理的・生態学的な学校要因の効果を重視する立場と、認知学派とよば

れる教師や子どもの知覚・認知を重視する立場とがある。生態学派の学校環境研究では、1970年代中盤以降、学習や問題行動が生じている学校環境そのものの効果が検討され始めた。例えば児童の不登校が、家庭環境や個人特性に関わらず学校生活の文脈の中で生じる (Pack, 1975)、学校運営方針の明確性と関連する (Jones, 1980) 等が報告されるようになった。Reynolds, Jones & St. Leger (1976) は、労働階級地域の学校調査において、生徒の問題行動に関わる学校環境要因として、就職率・校則・施設・組織・管理職及び教師の方針・賞罰制度・教師-生徒の関係、等の効果を検証した。Rutter (1981) は、多岐にわたる学校環境要因を取り上げ、図書館の利便性、個人専用の机や本の所有、教師の叱責や賞罰、学級の役職数、教職員組織のリーダーシップとチームワーク、授業と休み時間の区別の明確性や規則の浸透性、等の要因と児童の欠席行動に有意な関連を報告した。Rutter の学校特性の研究は学校環境要因のそれぞれが教育成果に及ぼす効果を検証する実際的で有益なものであったが、より体系的な分類は Gump (1980) による。Gump は学校環境を構成する種々の成分について、学校建築・設備等から構成される物理的周囲 (physical milieu)、教職員及び児童・生徒等から構成される人的要因 (human components)、授業等のカリキュラム及び制度から構成されるプログラム (standing patterns of behavior)、の3成分に独自の分類をおこなっている。

【人間の欲求と環境圧力】

一方、認知学派は社会心理学者によるグループダイナミックスの「集団の雰囲気」研究にその根源をもち、やがて、欲求-圧力モデル (Murray, 1938) を基盤とする社会的風土の研究として発展を遂げた。

認知学派のルーツとなる Murray は、人間に働きかけてさまざまな反応を引き起こす環境の影響を「圧力 (press)」と呼んだ。環境からの圧力に対する人間の反応にはまとまった一定の傾向がみられるが、この傾向は人間の内的な欲求に基づいている。従って、欲求-圧力モデルでは、人間行動を、人間の欲求と環境圧力の結合として理解する。これを根拠に、Pace

と Stern (1958) は、集団内の欲求の集積を測定することでその環境に現存する圧力、即ち社会的風土（雰囲気）を測定できるとした。また、環境圧力の理論を基盤に、Moos (1976) は、人間行動に効果をもつ基本的な環境は「人間関係」「個人発達と目標志向」「組織維持と変化」の3次元であると提唱した。

〔現実環境と選好環境〕

近年では、欲求-圧力モデルをさらに具体的に人間の環境適応に適用した研究も多く、人間の欲求（好ましい、望ましいと期待する環境、選好環境）と圧力（現実の環境）の乖離や一致度と適応の関係を解明する試みも進められている。例えば、Stern (1970) は、子どもの欲求（好ましいと考える環境）と環境の圧力（現実の環境に対する認知）の一致が学習効果を高めることを報告している。また、Fraser & Fisher (1983) らも、Hunt (1975) の人間-環境適合説 (Person-Environment fit) を理論的背景として、選好環境（好ましい学級）に対する評定値が高い学級では、児童の学力および現実の学級に対する評価も有意に高いことを報告している。

〔選好環境の測定方法〕

現実の授業環境の状態を測定・評定する指標は「現実 Actual」フォーム、好ましい授業環境の状態を測定する指標は「選好 Preferred」フォームと呼ばれる。Preferred は、初期の研究では理想の (ideal) と記述されていたが、近年では Preferred が一般的である。おそらく、到達し難い最善最上の状態やある種の価値観をイメージさせる ideal という言葉よりも、好ましく快適な状態を指す Preferred が適していたためだろう。

「Actual」と「Preferred」の環境は、教示文と質問（項目）文の一部が異なる同一の尺度によって測定される。同じ質問文に対して「現実」の教示文では、『次の文章は、あなたの現在の学級にどの程度当てはまりますか』となり、「選好」の教示文では、『次の文章は、あなたの学級にどの程度当てはまっていたら望ましいと思いますか』等となる。一つ一つの質問文は、原文（英文）では Actual の質問文の動詞の前に助動詞 would を加

えるだけで Preferred の文章として用いられるが、邦訳には若干表現の工夫が必要な場合もある。

現実と選好の学級環境の記述から実施者（教師）は、この二尺度の実施結果を比較することで、学級の状態を概観できる。二尺度の比較は、得点の高低の解釈を容易にする。例えば、担当学級の「教師の支援」「競争」等の評定値が高い場合、この現象について子どもたちが好ましいと捉えているのか、過剰であると捉えているのかは、他学級や全体平均等との比較からでは解釈が難しい。Preferred の評定値を基準とすれば、現在の学級に実際に不足または過剰な要因が一目瞭然となる。

3. 子どもの適応と現実・選好環境認知の検討事例

3.1. 大学の授業評価－学力とニーズ－

【目的】

現在ユニバーサル型（Trow, 1976）への移行期にあるわが国の大学教育においては、多様化する学生に対応したカリキュラムデザインが求められる。本研究目的は、授業計画の段階で考慮すべき情報を検討するため、学生の多様な学力やニーズ（選好する学習環境）に着目することの有効性を検証することとした。

【方法】

調査時期：2001年11月～12月に実施した。

調査対象：心理学系科目（1年次、半期・選択科目）を受講した首都圏の看護大学生100名（男性1名、女性99名）を対象とした。

調査項目：大学授業環境尺度 CUCEI: College University Classroom Environment Inventory (Treagust, Fraser & Dennis, 1986) 49項目のうち、日本版（佐古, 2002）を参考に講義型授業環境に適した35項目を用いた。

【結果と考察】

学生100名のデータを用いて因子分析（主因子法 Varimax 回転）をおこない、固有値1.00以上を基準に3因子構造を妥当として以下を抽出した。

3因子17項目の分散は全分散の38.6%であった。

I . 授業への満足度（現実の授業 $\alpha = .87$, 好ましい授業 $\alpha = .87$ ）

II . 授業への関与（ $\alpha = .70$, $\alpha = .79$ ）

III . 授業の革新性（ $\alpha = .74$, $\alpha = .77$ ）

(1) 「現実の授業」と「好ましい授業」

「現実の授業」と「好ましい授業」における3因子の平均値の差の検定を行った結果、「授業への満足度」($t=-8.30, p<.0001$)、「授業への関与」($t=-16.20, p<.0001$)、「授業の革新性」($t=-3.63, p<.0005$)、全ての因子において有意な差が認められた (Table 1)。すなわち、受講生が「この程度が好ましい」と期待・選好する評定値（以下、本節では「ニーズ」と記す）は、全因子において「現実の授業」の評定値を上回ることが示された。

Table 1.
Comparison of the Means for CUCEI-J Scales in University Students
(Hirata & Watanabe, 2005)

	Satisfaction			Involvement			Innovation		
	Mean	SD	t	Mean	SD	t	Mean	SD	t
Actual	4.28	(0.51)	-8.30*	2.13	(0.65)	-16.20*	3.51	(0.58)	-3.63*
Preferred	4.64	(0.40)		3.53	(0.76)		3.76	(0.69)	

(* P<.001)

(2) 授業評価と成績

授業評価と成績の関連を調べるため、「現実の授業」に対する評定値を従属変数として、「成績」を要因とする1要因分散分析を行った。成績については、当該科目の筆記試験の標準得点 (z score) によって、1.0以上

の受講生を成績上位群、-1.0以下を成績下位群、中間を成績中間群とした。その結果、「成績」の要因による有意な差が認められ、成績上位群・中間群は成績下位群よりも有意に満足度が高かった ($F [2, 97] = 3.853, p < .0245$)。

(3) 授業評価と成績・ニーズ

現実の授業評価と「成績」および学生の授業に対する「ニーズ」との関連を検討するため、現実の授業に対する評定値を従属変数、「成績」と「ニーズ」を要因とした2要因の分散分析を行った。学生の授業に対するニーズは、各因子における「好ましい授業」への評定値標準得点 (z score) によって、1.0以上の学生を高ニーズ群、-1.0以下を低ニーズ群、中間を中間群に分類した。その結果、「授業への満足度」においては、FisherのPLSD法による主効果多重比較の結果、「成績」の上位群・中間群と下位群の間に有意な差が示されたものの、主効果は認められなかった。ところが、「ニーズ」については主効果 ($F [2, 97] = 12.232, p < .0001$) が認められた。両要因間に交互作用は認められなかった。

一方、「授業への関与度」「授業の革新性」については、成績上位群ではこれらの要因に対してニーズの低い学生が0名、つまり存在していなかったため分析をおこなうことができなかった。

【まとめ】

本調査では、成績に関わらず、授業に対するニーズの高い学生は現実の授業に対しても満足度が高く、授業への期待や要望が低い学生は実際の授業においても満足していないことが示された。この結果は、学生による授業評価に、成績よりも授業への期待・ニーズの要因が深く関わっていることを示唆しているものといえる。また、成績上位群では「授業への関与度」「授業の革新性」についてニーズの低い学生が存在していなかったことは、成績上位の学生は成績中位・下位の学生に比べて授業への参加・関与や新しい教授法に対する期待が高いことを意味すると解釈できた。

3. 2. 特色ある公立高校—総合選択制高校の風土—

[目的]

研究目的は、現実 Actual および選好 Preferred フォームの学級環境尺度を特色の異なる2校で実施して、各校の特色を可視化することとする。2校の特色とはすなわち、「一般公立高校」と「総合選択制高校：複数のコースをもち、コースを超えて多様な科目選択ができる（小川，1993）」である。

[方法]

調査時期：2001年11月～12月に実施した。

調査対象：首都圏の総合選択制高校8学級301名（男子135名、女子166名）及び一般都立高校3学級115名（男子59名、女子56名）1～3年生合計全412名を対象とした。

調査項目：日本語修正版学級環境尺度 CES-J: Classroom Environment Scale for use in Japan（Hirata & Sako, 2000; Hirata, Fisher, & Fraser, 2001）全61項目を実施用いた。

[結果と考察]

一般校115名のデータを用いて因子分析（主因子法 Varimax 回転）をおこない、固有値1.00以上を基準に5因子構造を妥当として以下を抽出した。5因子27項目の分散は全分散の41.3%であった。

I. 学級での孤独感

（現実の学級 $\alpha = .88$, 好ましい学級 $\alpha = .91$ ）

II. 参加の容易さ（ $\alpha = .75$, $\alpha = .83$ ）

III. 学業成績の負担（ $\alpha = .78$, $\alpha = .70$ ）

IV. 規則の明確さ（ $\alpha = .70$, $\alpha = .85$ ）

V. 規律と規範（ $\alpha = .57$, $\alpha = .66$ ）

(1) 「現実の授業」と「好ましい授業」

抽出された5因子の合計素点を用いて「現実・選好」と「学校」を要因とする2要因の分散分析を行ったところ、全因子で「現実・選好」の主効

果が有意であった。すべての因子において、「好ましい学級」の評定値が「現実の学級」を有意に上回り、交互作用は認められなかった。

(2) 総合選択制高校の風土

「学校」の主効果については、第Ⅱ因子のみで有意となり、一般高校以上に総合選択制高校の生徒が授業や学級活動などに参加し易いと感じていることが明らかになった (Figure 1)。

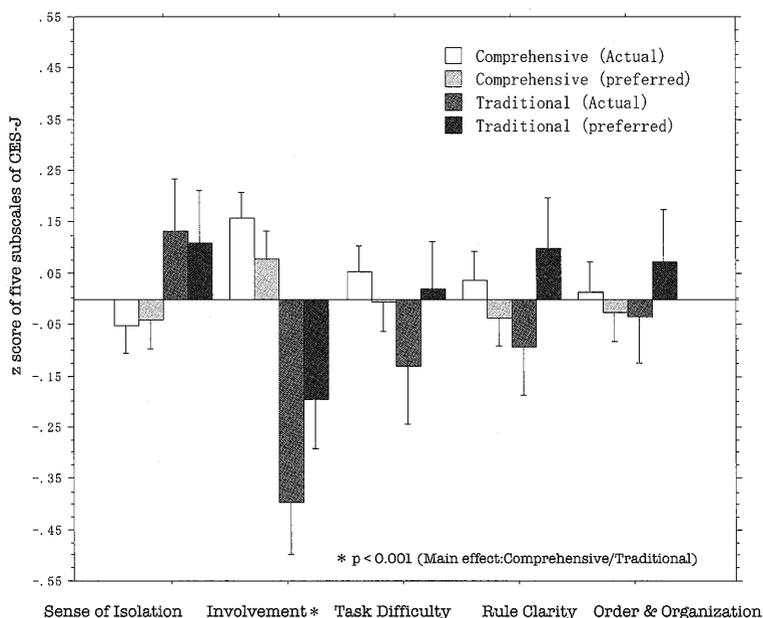


Figure 1 Z-score of students' perception toward the actual and preferred classroom environment, A traditional and a comprehensive upper secondary school with selection system students.

[まとめ]

本調査では、抽出された全ての学級環境要因において総合選択制高校・一般高校ともに、「現実の学級」と生徒が考える「好ましい学級」の状態には隔たりがあることが示された。すなわち、生徒は学校によらず、学級

における孤独感の軽減、参加の容易さ、学業成績負担の軽減、規則の明確化、規律の緩和が望ましいと捉えていた。高校生が学校生活で抱えるさまざまな負担の一端と理解することができよう。一方、学校特色の比較では、「参加の容易さ」において有意な差が認められた。この結果は、総合選択制の風土の特色である「ゆるやかさ（佐古，1993）」とも合致する。学習環境における自立性や自由度の高さ等を反映したものと解釈できるだろう。

3. 3. うまく機能しない、難しい学級—教師の手応えの可視化—

[目的]

本調査は、兵庫県の当時14歳の中学生による連続殺傷事件、いわゆる神戸連続児童殺傷事件（『酒鬼薔薇事件』『酒鬼薔薇聖斗事件』とも呼ばれる）が発生した1997年当時、同県内で実施したものである。奇しくも同時期、調査対象となった公立B中学校では、加害者とされた少年Aと同学年である2年次の生徒たちについて、担当教諭たちは「生徒一人ひとりに勝手な行動があり、学級がまとまらない」「学級集団として機能しない」「何を考えているのかわからず、通常の指導が難しい」との共通の危機意識を抱いていた。

そこで、当時の校長を代表とする学校側と調査側とで検討会を重ね、当初計画されていた教師と子どもの現実・選好の学級環境認知の比較に加え、今回は学級間および学年間比較の分析に重点を置くこととした。従って本研究の目的は、学校現場で教師が感じる目に見えない手応えを可視化できるデータとして明らかにすること、それらを学校の問題の早期発見と理解、および生徒指導に役立つ資料とすることとした。

[方法]

調査時期：1997年5月中旬に実施した。

調査対象：兵庫県の公立B中学校20学級の全校生徒669名、および全教諭29名を対象とした。

子どもの適応と学級環境認知における現実・選好の乖離について

調査項目：学級環境尺度 (Classroom Environment Scale, Trickett & Moos, 1973) から選択した22項目、日本版学級環境尺度 (Hirata & Sako, 1999) より 9 項目、独自尺度 (平田・渡部・相馬, 1998; 平田・小泉・菅野, 1999) より取捨選択した19項目から成る合計50項目について二種の教示 (現実フォーム、選好フォーム) を呈示の上、総計100項目 (50項目×2) について回答を求めた。なお、各尺度については作成年ではなく発行年を記してあるため、調査実施より後年となっているものもあることを付記しておく。

【結果と考察】

生徒669名のデータを用いて因子分析 (主成分分析後、Varimax 回転) をおこない、固有値1.00以上を基準に 5 因子構造を妥当として以下を抽出した。5 因子22項目の分散は全分散の33.93%であった。

- I . 教師のコントロール (現実の学級 $\alpha = .80$, 好ましい学級 $\alpha = .89$)
- II . 学級での疎外感 ($\alpha = .82$, $=.81$)
- III . 学業の負担 ($\alpha = .59$, $=.82$)
- IV . 規律の乱れ ($\alpha = .78$, $=.82$)
- V . 授業からの逸脱 ($\alpha = .60$, $=.69$)

(1) 「現実の学級」と「好ましい学級」

抽出された 5 因子の合計素点を用いて「現実・選好」と「教師・生徒」を要因とする 2 要因の分散分析を行った。結果、教師では「教師のコントロール」と「授業からの逸脱」、生徒では「学級での疎外感」を除く全因子で「現実・選好」の主効果が有意であった。すなわち、教師は現在よりも教師による管理や生徒の授業逸脱を減少させたいと考え、生徒もまた現在よりも教師の管理や学業負担の軽減、規律は正しく、授業逸脱はしないほうが望ましいと考えていた。しかし、「教師のコントロール」、「学業の負担」、「規律の乱れ」の 3 因子では交互作用が認められており、教師と生徒では現実と選好の差異の程度は同じではないことが示唆された (詳細

は、Table 2参照)。

上記の通り、教師と生徒では、現実の学級環境に対する評価、現実と選好の差異の程度は異なるのであるが、好ましいとする学級の状況については全因子において有意な差は認められなかった (Table 3)。教師も子どもも好ましい、望ましいと期待する学級の姿には違いがないことがわかる。

(2) うまく機能しない、難しい学級の特徴

今回の研究目的の重点は、担当教諭がうまく機能しない、学級経営が難しいと感じる2年次の学級の特徴を明らかにすることにあつた。そこで次に、学年を独立変数、現実・選好環境に対する各因子の素点平均点を従属変数とした1要因分散分析をおこない、学年間比較を試みた。

【1・3年生の特色】

学年別の分析結果は、次の通りである (Table 4)。1・3年次では、生徒たちは「学級での疎外感」を除く全因子、すなわち「教師のコントロール」、「学業の負担」、「規律の乱れ」、「授業からの逸脱」において、現実の学級と好ましい学級の状況は違ふと捉えていることが示された。1・3年次の子どもたちは、先生の管理はもっと緩やかに、学業負担は少なく、規律は正しく、授業逸脱はしないほうが望ましいと考えていた。しかし唯一、「学級での疎外感」については現実と選好の状況が一致しており、このままでよいと認識していることが示された。

Table 2.
Validation Data (Mean, Standard Deviation, ANOVA Results) for each scale of CES-J.II (Hirata & Fisher, 2003)

Scale	Form	No.of Items	Teacher (n=29)			Students (n=669)			Interaction
			Actual vs.Pref.			Actual vs.Pref.			Form vs.Group
			Mean	SD	F	Mean	SD	F	F
I. Teacher Control	Actual	6	13.76	3.43	13.74 **	17.16	4.07	4.74 **	17.33 **
	Preferred		16.24	2.03		15.71	2.61		
II. Sense of Isolation	Actual	6	12.21	2.65	n.s.	10.11	4.07	n.s.	n.s.
	Preferred		11.38	2.21		10.46	2.58		
III. Task Difficulty	Actual	5	11.76	2.13	n.s.	14.23	3.06	28.23 **	14.52 **
	Preferred		11.79	1.88		11.81	3.22		
IV. Order	Actual	2	4.00	1.69	n.s.	4.50	1.85	17.13 **	6.58 *
	Preferred		3.86	1.75		3.38	1.73		
V. Discipline	Actual	3	7.07	1.28	13.77 **	6.11	1.76	33.80 **	n.s.
	Preferred		8.45	1.70		8.27	2.53		

*p<.05, **p<.01.

Table 3.
Simple main effect for Group at Actual and Preferred (Hirata & Fisher, 2003)

Scale	No.of Items	Actual		Preferred	
		Simple effect		Simple effect	
		Teacher vs. Students.	F	Teacher vs. Students.	F
I. Teacher Control	6		27.98 **		n.s.
II. Sense of Isolation	6		10.76 **		n.s.
III. Task Difficulty	5		17.64 **		n.s.
IV. Order	2		n.s.		n.s.
V. Discipline	3		5.51 *		n.s.

**p<.01.

【2年生の特色】

一方、担当教諭がうまく機能しない、学級経営が難しいと感じる2年次では、「教師のコントロール」、「学業の負担」、「規律の乱れ」、「授業からの逸脱」のみならず、「学級での疎外感」についても有意な差異、つまり現実と選好の学級環境にギャップ（乖離）があることが明らかになった（ $F[2.197]=12.10, p>.01$ ）。2年次の生徒たちは、「クラスにとけこむ」「学級に自分の友達がたくさんいる」「皆とうまくやっていく」などの状況を

望んでいない、など現状よりも自分が孤立するあるいは疎外される学級環境が望ましいと考えていることが示されたのである (Figure 2)。

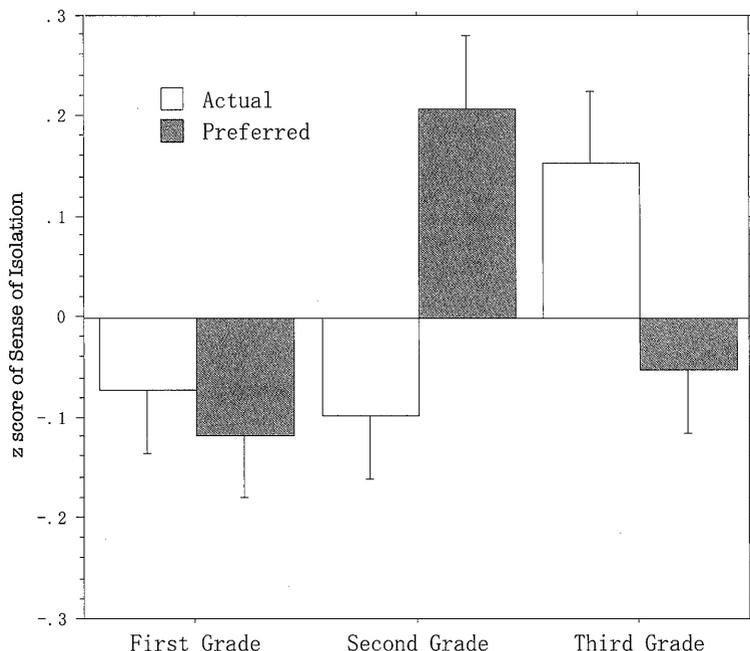


Figure 2 Z-score of students' Sense of Isolation of the Actual and Preferred classroom, "Difficult class"(Second Grade) and the ordinary classes.

[まとめ]

学級環境認知の測定によって、本事例における「うまく機能しない、難しい学級」の実態としては、まとまりたいが混乱してしまう学級集団ではなく、生徒一人ひとりがこの学級と関わりたくない、クラスの生徒と友達になりたくない、と捉えている学級像を浮かび上がった。学校生活において、現実と好ましいと思いつく学級にギャップ（乖離）があるのは当然のことだろう。しかし、集団の成員が自らの所属する環境への帰属を望まな

子どもの適応と学級環境認知における現実・選好の乖離について

いとき、集団の機能は損なわれていく。本事例2年次においては学級集団の指導に先立ち、担当教諭が個別の生徒一人ひとりを理解する働きかけをおこなう指導方針が定められた。本調査は、現場の教師の目に見えない手応えを目に見えるデータとして可視化した事例と位置づけられるだろう。

3.4. 少年鑑別所－非行少年の学級環境認知－

【目的】

研究目的は、非行・逸脱行動を示す少年の学級環境に対する評価と学校生活に期待する要因・その程度、および現実と期待の乖離（一致度）等の特徴を明らかにすることとする。

【方法】

調査時期：2004年10月から2005年1月に実施した。

調査対象：首都圏一般公立中学校生徒121名、少年鑑別所収容生徒87名を対象とした。

調査項目：今回対象となる少年鑑別所収容少年及び一般中学生に適した尺度を構成するべく、学級環境尺度の日本語訳修正版（CESJ; Hirata & Sako, 1999; Hirata & Fisher, 2003）の項目を取捨選択および追加した40項目を用いた。

【結果と考察】

一般中学生および少年鑑別所収容生徒208名のデータを用いて因子分析（主因子法、Varimax回転）をおこない、固有値1.00以上を基準に5因子構造を妥当として以下を抽出した。5因子22項目の分散は全分散の48.0%であった。

I. 教師のサポート

（一般：現実の学級 $\alpha = .85$, 好ましい環境 $\alpha = .84$ ）

（非行：現実の学級 $\alpha = .87$, 好ましい環境 $\alpha = .90$ ）

II. 学級での疎外感 ($\alpha = .54$, $\alpha = .83$)、($\alpha = .84$, $\alpha = .85$)

Ⅲ. 授業からの逸脱 ($\alpha = .62, \alpha = .56$)、($\alpha = .71, \alpha = .76$)

Ⅳ. 規律の乱れ ($\alpha = .72, \alpha = .63$)、($\alpha = .71, \alpha = .74$)

Ⅴ. 学業の負担 ($\alpha = .64, \alpha = .63$)、($\alpha = .69, \alpha = .72$)

(1) 「現実の学級」と「好ましい学級」

抽出された5因子の素点合計を従属変数として、学級環境（現実／選好）と個人属性（一般群／非行群）を要因とした2要因分散分析をおこなった。結果、「教師の支援」、「学級での疎外感」、「授業からの逸脱」、「規律の乱れ」の4因子において、一般中学生・少年鑑別所収容少年ともに現実・選好環境の要因に単純主効果が認められた（Figure 3, 4, 5, 6, 7）。すなわち、非行行動の有無によらず、子どもたちは現実以上の教師のサポートや、孤立しない学級の雰囲気、授業逸脱や規律の乱れの軽減を好ましいと捉えていることがわかった。

(2) 非行少年の特色

一方、Figure 3, 4 では、「教師の支援」、「学業の負担」の2因子において交互作用が認められている。鑑別所収容少年では、一般中学生以上に、教師との親密な関わりや支援を求める程度、学業の負担を感じる程度が強いことが明らかとなった。このことは、子どもの非行行動と現実と選好する環境の乖離の関係を示唆するものと考えられた。

【まとめ】

ここでは、教師との人間関係や学業の負担等、特定の要因において、非行群が一般群以上に、現実・選好の学級環境にギャップ（乖離）を感じていることが示された。非行行動と学級環境認知における現実・選好の乖離については、今後、特にこれら2因子に焦点化した評価尺度を作成して、Stern (1970) や Fraser & Fisher (1983) らの知見の検証を重ねなければならない。

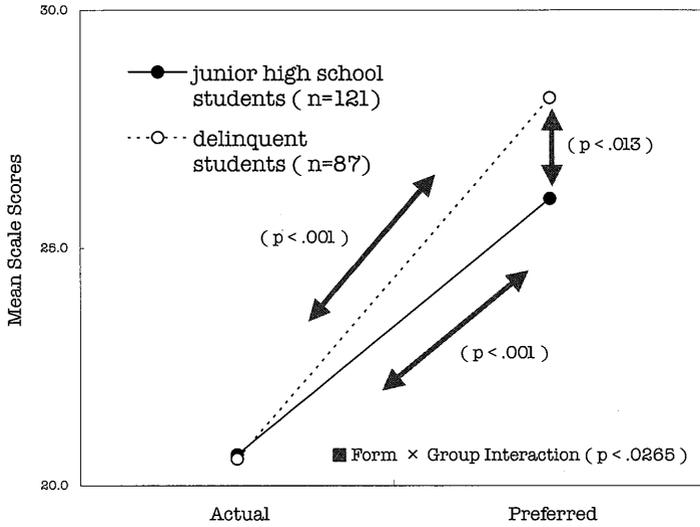


Figure 3
Effect of Student's Behavior on Actual & Preferred
'Teacher Support'

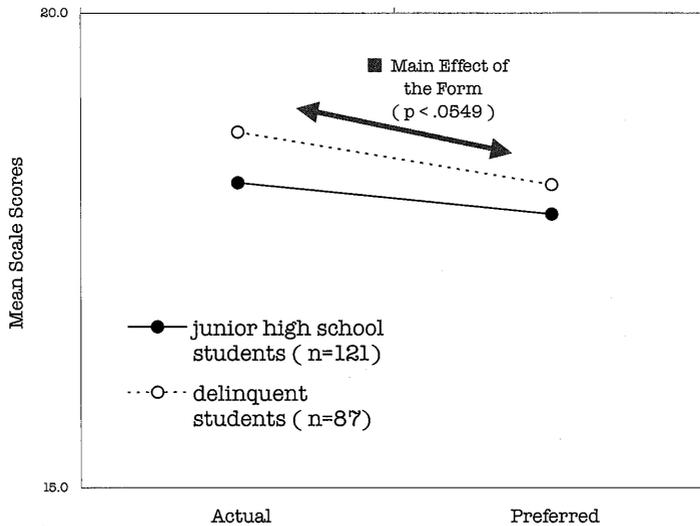


Figure 4
Effect of Student's Behavior on Actual & Preferred
'Sense of Isolation'

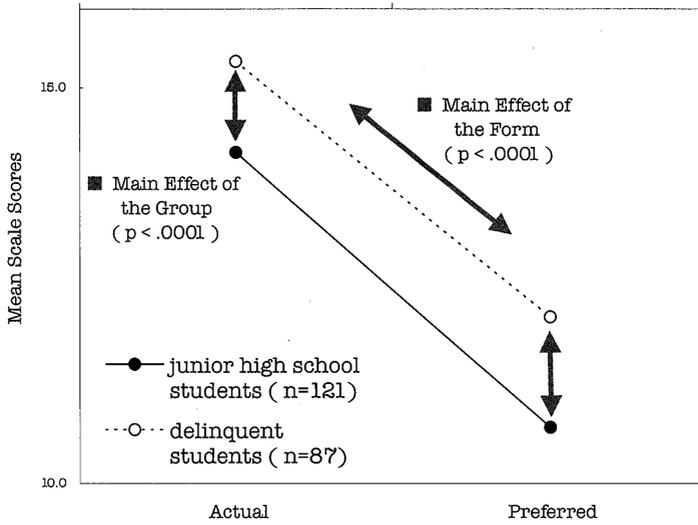


Figure 5
Effect of Student's Behavior on Actual & Preferred
'Deviation from Class'

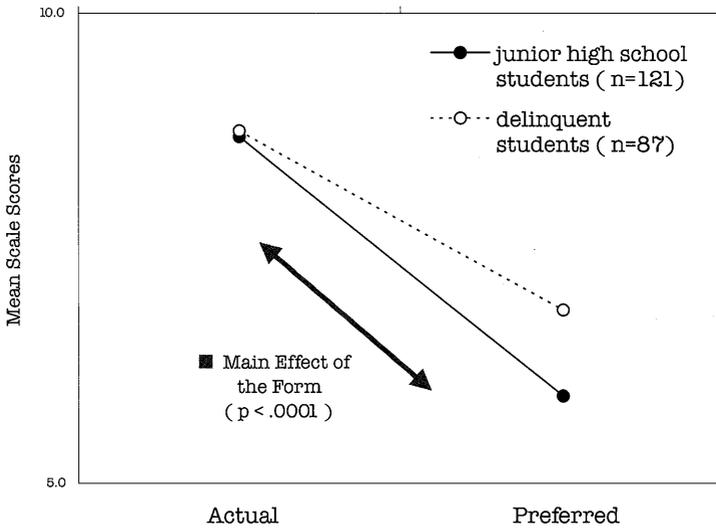


Figure 6
Effect of Student's Behavior on Actual & Preferred
'Order & Organization'

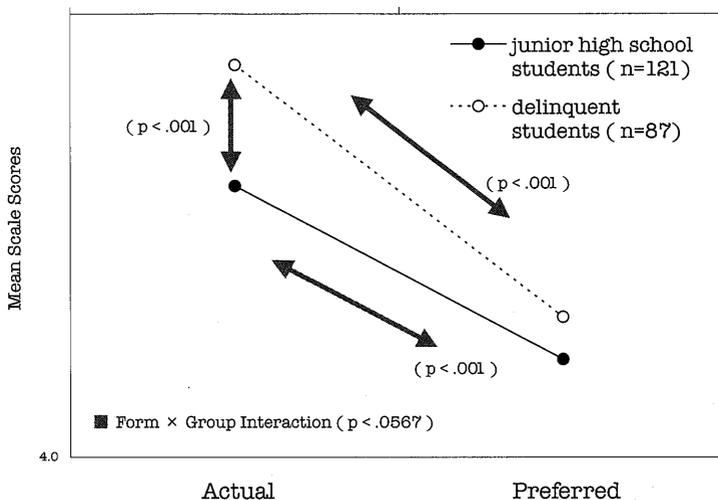


Figure 7
Effect of Student's Behavior on Actual & Preferred
'Achievement Responsibility'

4. 総合考察

本稿で検討した事例は、2008年現在まで過去10年間に実施した調査データを「子どもの適応と学級環境認知における現実と選好の乖離」という視点から考察したものである。すでに論文、書籍、学会発表抄録として刊行されたデータではあるが、本稿ではそれらを概観することで新規に考察を試みた。すなわち、毎回個別の研究目的のもとに実施されたこれらの調査結果において、「現実と選好の乖離」という現象と子どもの適応の状況になんらかの共通性を見出すことを目的とした。

第一に「大学の授業評価－学力とニーズ」²⁾では、定期試験成績の優秀以上に大学生の授業に対する期待（選好）が授業満足度につながることで、成績上位群では授業関与や指導法の革新性へのニーズ（選好環境への期待）が低い者が存在しなかったことなど、Fraser & Fisher (1983) の選

好環境に対する評定値が高い学級では、児童の学力および現実の学級に対する評価も有意に高いとした先行研究を支持する結果となった。第二に「うまく機能しない、難しい学級－教師の手応えの可視化－」³⁾では公立中学校における学級経営が困難な学年では学級からの孤立や疎外を好ましいとする学級像が示され、学級適応と現実・選好の乖離の関連が示唆された。第三に「特色ある公立高校－総合選択制高校の風土－」⁴⁾では、特色あるカリキュラムを展開するモデル校の風土が示されたものの、伝統的な公立校にもモデル校にも現実・選好の乖離という点からは特徴的な差異は見出されなかった。最後に「少年鑑別所－非行少年の学級環境認知」⁵⁾では非行行動のある子どもでは、非行行動のない一般中学生よりも現実と選好の学級環境認知の乖離が大きいことが指摘された。これら結果は、Hunt (1975) の人間－環境適合説に基づく主要な先行研究 (Stern,1970; Fraser & Fisher, 1983) の知見とも合致する。本稿では、現実・選好学級環境の評価手法が子どもの学校適応に一定の有益情報をもたらすものであり、学校現場における子どもの問題行動の早期発見・予防のための生徒指導に活用できる可能性が示唆されたといえる。

5. 今後の課題

今後の課題は、本稿で示唆された学級適応と現実・選好の乖離の関連を明らかにするため、当面は特定の学級環境要因に焦点化した尺度構成である。同時に、現実の環境に対する認知、選好する環境に対する認知の生成要因について心理学的な概念で説明せねばならない。選好環境は客観的に判断された ideal な状態ではなく個人が好ましいと期待する preferred な状態である。従って、その程度の決定には、個人の達成動機、要求水準や原因帰属、統制の所在 Locus of Control における特定期待 specific expectancy、一般期待 generalized expectancy など、既存の枠組みで説明可能な要因が関わっているだろう。学校・学級は子どもにとって日常的な

場面であるから、選好環境は事態に特有な特定期待と理解することもできる。特定期待の効果が強いのであれば、要求水準や原因帰属とは特性が異なる可能性がある。一方、学校生活は類似経験が豊富に想起されるため新規の状況においても一般期待が効果をもつとすれば、選好環境の程度は環境操作など外的な働きかけで変動させることが困難になる。いずれにしても、本稿で扱ったデータは現象を捉えるに留まっている。今後、研究計画を精査せねばならない。

データ出典

- 1) 平田乃美 (2007) 第7章教育環境－教師、子ども、学びのための環境－『朝倉心理学講座第12巻 環境心理学』佐古順彦・小西啓史編, 朝倉書店.
- 2) 平田乃美・渡邊亮一 (2005) 大規模教室での講義型授業に対する看護学生のニーズと評価－プレゼンテーション・ソフトウェアを用いた心理学科目の受講生を対象として－自治医科大学看護学部紀要 3, 1-15.
- 3) 平田乃美・小川洋・河村美穂・山本裕子・野嶋栄一郎 (2002) 「現実の学級」と「好ましい学級」－総合選択制高校と一般高校の生徒による学級環境の評価－日本教育心理学会第44回総会発表論文集, p155.
- 4) Hirata, S. & Fisher, D.L. (2003) Chapter 16: Students and Teachers' Perception toward Actual and Preferred Classroom Environment in Japanese Junior-High School. *Future Learning Environments: Studies In Technology-Rich Classrooms*. In Fisher D.L., et.al., (Eds.). World Scientific Publishing, Singapore.
- 5) Hirata, H., Ishikawa, M., & Fisher, D.L. (2007) Evaluations of Actual and Preferred Classroom Environment among Japanese Juvenile Delinquents. Paper presented in AERA Annual Meeting, Chicago, U.S.A., 31-115, p176.

引用文献

- Gump, P.V. (1980) The school as a social situation. *Annual review of Psychology*, 31, 553-582.
- Fraser, B.J., Treagust, D.F., & Dennis, N.C. (1986) Development of an instrument for assessing classroom psychological environment in universities and college. *Studies in Higher Education*, 11, 43-54.
- Fraser, B.J. & Fisher, D.L. (1983). Use of Actual and Preferred Classroom Environment Scales in Person – Environment Fit Research. *Journal of Educational Psychology*, 75 (2), pp. 303-313.

- Fraser,B.J. and Walberg,H.J. (Eds.), (1991) *Educational Environments: Evaluation, Antecedents and Consequences*. Oxford: Pergamon Press.
- 古川みどり (1988) 小学校環境評価に関する研究, *心理学研究*, 58 (6), 359-365.
- Hirata,S. & Sako,T. (1999). *Perceptions of School Environment among Japanese Junior High School, Non-attendant, and Juvenile Delinquent Students*. *Learning Environment Research, An International Journal*, 1 (3), pp. 321-331.
- Hirata,S., Fisher,D.L., & Fraser,B.J. (2001) *Students and Teachers' Perception toward Actual and Preferred Classroom Environment in Japanese Junior-High School*. Paper presented at AERA Annual Meeting, Seattle, U.S.A.
- Hirata,S. & Fisher,D.L. (2003) Chapter 17: *Students and Teachers' Perception toward Actual and Preferred Classroom Environment in Japanese Junior-High School. - The Potential of Psychological Measures in Classroom -*, In Khine,M.S., & Fisher,D. (Eds), *Technology-rich Learning Environments: A Future Perspective*. World Scientific. Singapore.
- 平田乃美・菅野純・小泉英二 (1999) 不登校中学生の学校環境認知の特性について *カウンセリング研究*, 32 (2) pp10-19.
- 平田乃美・渡部正・相馬一郎 (1998) 非行少年の学校環境認知とローカス・オブ・コントロール *犯罪心理学研究*, 36 (2) pp1-18.
- Hunt, D. E.. (1975) *Person-Environment interaction: A challenge found wanting before it was tried*. *Review of Educational Research*, 45, 209-230.
- 伊藤垂矢子・松井仁 (2001) 学級風土質問紙の作成 *教育心理学研究*, 49, 449-457.
- Jones,A. (1980) *The schools view of persistent non-attendance. Out of school; modern perspectives in truancy and school refusal*. 171-188.
- Moos,R.H. (1976) *The Human Context, Environmental Determinants of Behavior*. Palo Alto, California; John Wiley & Sons, Inc. (望月衛訳「環境の人間性」朝倉書店).
- Murray,H.A. (1938) *Explorations in personality*. NY: Oxford University Press. (外林大作訳編「パーソナリティ I・II」誠信書房)
- 小川洋 (1993) 総合選択制高校と高校教育改革, 西本憲弘・佐古順彦編「伊奈学園ー新しい高校モデルの創造と評価」, 第一法規.
- Pace,C.R. and Stern,G.G. (1958) *An approach to the measurement of psychological characteristics of college environment of psychology*. *Journal of Educational Psychology*, 49,269-277.
- Pack,D.C. (1975) *Truancy and indicipline*. *The Scottish Educational Journal*. 7 Mar 1975. 256-260.
- Reynold,D., Jones D.,and St.Leger, S. (1976) *Schools do make a difference*. *New Society*. 37, 223-225.
- Rutter,M. (1981) *School influences on children's behavior and development: the 1979 Kenneth Blackman lecture*, children's Hospital Medical Center, Boston. *Annual Progress in Child Psychiatry & Child Development*. 170-197.
- 佐古順彦・鶴巻一郎 (1993) *伊奈学園のキャンパスプラン*, 西本憲弘・佐古順彦

- 編「伊奈学園－新しい高校モデルの創造と評価」, 第一法規.
- 佐古順彦 (2002) 大学生による授業評価 (2): 大学学級環境尺度 (CUCEI: College and University Classroom Environment Inventory) 日本版の「英語科教科学級」への適用. ヒューマンサイエンス, 14 (2)、24-29.
- Sarason, S.B. and Klaber, M. (1985) The school as a social situation. *Annual Review Psychology*, 36, 115-140.
- Stern, G.G. (1970) *People in Context*. New York: John Wiley & Sons.
- Trickett, E.J. & Moos, R.H. (1973). Social environment of junior high and high school classrooms. *Journal of Educational Psychology*, 65 (1), pp. 93-102.
- Trow, M.: *高学歴社会の大学*. 天野郁夫・喜多村和之訳, 東大出版会, 1976.

付記

本稿作成中に第二著者佐古順彦先生がご逝去されました。謹んで哀悼の意を捧げるとともに、長年の御指導に記して感謝申し上げます。

本稿作成には、平成20年度 文部科学省科学研究費補助金 若手研究 (B) 「学校場面における子どもの逸脱行動と現実・選好学級環境認知の関連 (課題番号: 19730525、研究代表者: 平田乃美)」の助成を受けた。

なお、本稿「3. 4. 少年鑑別所－非行少年の学級環境認知－ (2007年アメリカ教育学会シカゴ大会発表データ)」を改題・再分析したものは、『犯罪心理学研究』第47巻1号以降に掲載される予定である。